

ジヒドロピリジン系カルシウム拮抗薬重複投与についての多施設調査

かみはやし調剤薬局 / 井上 奏 大石 美也

【目的】今日の高血圧治療において、単剤で十分な降圧コントロールが得られない場合には合併症を考慮し異なる機序の薬剤を組み合わせ投与することが一般的である。しかし、実際にはジヒドロピリジン系 Ca 拮抗薬(以下 DHPs)が重複投与されることがある。そこで、これを評価しうる薬理学的情報を収集し、実際の併用状況を調査、検討した。【方法】1. 情報収集: 高血圧治療ガイドライン、DHPs 重複投与に対する製薬メーカーの見解、インターネットによる情報・文献検索、DHPs の特性の見直し 2. 併用状況調査: 平成 17 年 1 月 1 日から 5 月 31 日までの間、(株)ダイチク 17 店舗とホーム調剤薬局の計 18 店舗で応需した重複症例 225 例を対象に、その他の併用薬や合併症を調査し以下の項目について検討 重複投与された薬剤の組み合わせ特性 患者背景から重複の意義 重複投与に対する監査の視点

【結果】高血圧治療ガイドラインや文献検索、製薬メーカーからの聞き取りをまとめると、DHPs 重複投与は、有用性によってではなく降圧効果が充分ではない場合の結果的な併用がなされていることが考えられる。多施設調査の結果、実際には第 2 世代の重複が 43%、第 2 世代と第 3 世代の組み合わせが 40%と大半を占めていた。また、DHPs を重複投与されている患者の年代に差はなかった。さらに、98.2%が 2 剤併用であり、93%が同科(同医師)による重複投与だった。重複投与の組み合わせはアムロジピンとニフェジピンが 58 例と最も多かった。有意差は無かったが、他科に渡る重複投与の場合、他のクラスの降圧剤なしで DHPs が併用される率が多い傾向が見られた。遮断するカルシウムチャネルの特性から薬剤の組み合わせを検討したところ、チャネルの特性によって組み合わせる傾向は見られなかった。その他に併用されている降圧剤の結果から、DHPs を併用しながらも、次のステップとしては高血圧治療ガイドラインに沿う傾向は見られた。【まとめと考察】重複投与と症例の検討から、組み合わせは長く安定した作用を得られるように作用時間を考慮し投与されていると考えられる。文献検索の結果、DHPs 重複投与についての情報は僅かであり、実際の併用例では合併症との関連性も見られなかったことから、重複投与する利点や、さらに薬剤の特性により組み合わせを考慮するだけの客観的根拠はないと考えられる。それでも重複されるのは、他クラスの降圧剤を併用したにもかかわらず十分に降圧が得られなかったためと考えられ、DHPs のみの重複も多かったことから、DHPs は副作用や相互作用が少ないので、追加投与しやすい傾向があると考えられる。以上のことから、DHPs 以外に降圧剤の併用がない場合の重複投与には他の降圧剤が投与できない理由が何かという視点を持ち、薬歴の精査や患者からの聞き取りを行う必要がある。また、今後 DHPs が虚血性心疾患や腎疾患に対し有用かどうか明らかにされれば、その情報をいち早く収集し、患者の病態により合った薬剤が投与されたのかどうかを監査することも必要になると考える。

